

保育者が乳幼児と信頼関係を築くためのかわりに関する事例研究—社会的参照を手がかりとして—

# 保育者が乳幼児と信頼関係を築くためのかわりに関する事例研究

## —社会的参照を手がかりとして—

藤田 智子<sup>1\*</sup>、大桃 伸一<sup>2</sup>

乳幼児にとって認定こども園等の保育施設は家族以外の人と一日の大半を過ごす場所であり、家族と離れる不安を取り除き、自己を発揮しながら生活するには保育者との信頼関係が必要不可欠である。本研究では生後9カ月頃から見られる社会的参照を保育者が受け止め、適切に応答するというやりとりを重ねることが信頼関係を築くかわりのひとつとなり得ると仮定し、事例をもとに検討することを目的とした。事例から、①社会的参照は行動を決定・調整する手がかりを保育者に求める内容が、年齢が上がるにしたがって、「受容」から「確認」へと変化していくこと、②子どもの視線を保育者が受け止め、適切にかかわればそれが保育者への信頼となり、信頼関係を築く基盤となり得ること、③信頼関係を築く基盤となり得るには、子どもの性格や行動を十分理解し、子どもからの視線を予測する配慮が大切であること、などが明らかになった。社会的参照への応答が、信頼関係を培う要素となることを保育者が意識化すれば、かわり方に、より一層の配慮ができるようになり、自己肯定感が育つことにもつながることから、保育者の社会的参照に対する意識化の必要性が示唆された。

キーワード： 保育者、信頼関係、社会的参照、自己肯定感

### はじめに

認定こども園等の保育施設で乳幼児を保育する際、保育者（認定こども園の保育従事者は本来保育教諭という名称であるが、ここでは保育者とする）との信頼関係をつくることは子どもの情緒の安定という面において大切である。幼保連携型認定こども園教育・保育要領に「乳幼児期の園生活では保育教諭等を信頼し、信頼される保育教諭等によって受け入れられ、見守られているという安心感をもつことが必要であり、かけがえのない存在として受け止められ、認められることが自分への自信や自己肯定感の育成につながっていく<sup>1)</sup>。」とあるように、保育者と信頼関係を築くことができれば、安心して自己を表出できるようになり、意欲的に物事にかかわれるようになる。このような行動を保育者が適切に受け止めれば、自信や自己肯定感

が培われることになるであろう。保育者とのかわりのなかで、乳幼児が自分の行動に対して保育者の反応を見ようとする姿が見られることがある。それは多くの場合、初めての事象にかわりをもとうとするときである。「触れても良いものなのか」「委ねても良いものなのか」と、不安な表情、あるいは泣きながら保育者の表情を窺い、頼ろうとする。保育者が笑顔でうなづく、「大丈夫」と声をかけることで、子どもはようやく自分からその事象にかかわろうとする。このような乳幼児の姿は、新奇な事物への大人の感情反応をモニターする「社会的参照」と捉えることができる<sup>2)</sup>。

社会的参照は、新奇な事象や曖昧な事象に対して他者の情動表出や声を手掛かりとして自分の行動を決めていくことであるといわれる(Feinman,1982)。大人の反応によって子どもは安心して自分の行動を調整し、それがうまくい

<sup>1</sup> 認定こども園 坂井輪東幼稚園 <sup>2</sup> 新潟県立大学人間生活学部子ども学科

\* 責任著者 連絡先:fujita@sakaiwa.ed.jp

利益相反:なし

くことで、大人を信頼するようになる。そしてこの経験の積み重ねが保育施設等では保育者と子どもとの信頼関係、愛着関係を築いていく要素のひとつとなる。しかしながら、愛着欲求の動機づけとして養育者などへの注視行動が生じること (Ainsworth et al., 1978) や、子どもの社会的参照の現出・様相・展開が本質的に他者の配慮やふるまいのあり方に依存せざるを得ないものである<sup>3-1)</sup> ということを果たしてどのくらいの保育者が認識しているであろうか。生後9カ月頃から見られる「社会的参照」を意識化して保育を実践するということは、乳幼児の、他者とのコミュニケーションにおける発達を理解しながら保育実践するということであり、これが実践できれば子ども一人一人の発達に即したかかわりができるということになる。「社会的参照」を理解し意識して、発達段階にふさわしい配慮のもとで適切にかかわることで、望ましい方向へと成長していくであろう。遠藤・小沢らは、「発達早期段階における現実の社会的参照は、養育者の巧みな配慮に支えられた子どもとの双方向的な社会的交渉としてあるということに研究者はもっと積極的な関心をもってよいのではないだろうか」<sup>3-1)</sup> と指摘している。この指摘は研究者だけでなく、保育実践者にも当てはまるであろう。

本研究は、新潟市内のP認定こども園において、0歳児から2歳児の乳幼児の「社会的参照行動」の事例をもとに、子どもが保育者と信頼関係をつくっていく過程や保育者の望ましいかかわり方について考察することを目的とする。

### 方法

**調査方法:** 7:30～19:00の保育時間内において、自然的観察法による観察を行う。遠藤・小沢による、子どもが明確な頭部回転を伴った注視行動を保育者に向けたとき<sup>3-2)</sup> と定義されている「参照視」が見られたエピソードを子どもの姿と保育者のかかわりを視点に筆者が記録する。考察が推測の域であると判断した場合は該当保育者からかかわりに至った背景、配慮に対する意図を質問し、明らかにする。

**調査時期:** 2015年4月から2015年9月  
月曜日から金曜日の7:30～8:30、16:00～19:00  
に同じ保育室で過ごす0歳児、1歳児、2歳児。

週に1日ずつ9:00～16:00(午睡時間12:30～14:30を除く)に0歳児、1歳児、2歳児の各クラス。

**調査対象:** 新潟市内の幼保連携型P認定こども園の0歳児6名、1歳児12名、2歳児12名  
計30名

### 事例と考察

#### 事例1

2015年7月中旬

0歳児(生後10カ月) 女児A

延長保育時における保育者とのかかわりの場面

担当保育者U以外の保育者Vが両手を差し出して抱こうとすると、すかさずAは担当保育者Uの方を向き、じっと見つめる。担当保育者Uが笑顔でうなずくと、Aは初めて両手を出し、Vに抱かれることを受け入れる。

#### 考察

Aは4月に入園した女児である。入園当初はこども園という初めての場所、初めての保育者に対し、泣くことで不安な心情を表していた。担当保育者が家族以外でも安心できる存在だと分かり始めると、保育者Uに抱かれながら身近にある玩具に触れたり、担当以外の保育者にも微笑んだりするようになっていった。7月は保育室の環境にも慣れ、保育者が見守るなかで探索行動や玩具で遊ぶ姿が見られるようになり、行動範囲が広がっている時期でもあった。環境に順応する様子を見ていた保育者Vはそろそろ受け入れてもらえる頃だろうと考えてAに両手を差し出してみたとのことである。しかしAは担当保育者Uをじっと見つめ、すぐに手を出そうとはしなかった。環境に慣れてきたとはいえ、日中常にかかわりのない保育者Vに対してはやはり不安があったようである。「私はこの人に抱っこしてもらってもいいの?」という表情に見えた保育者Vは感じとったそうである。このとき、保育者Uも同様に感じたことから、Aが安心できるよう笑顔でうなず

いて見せた。Aはこれから起こそうとする行為が適切なのか、そうでないのかという判断を「安心できる大人」である保育者Uに委ねた。結果、保育者Vも自分に愛情を注いでくれる存在であることを認識し、Aの世界が更に広がることになったと考えられる。

## 事例2

2015年8月下旬

0歳児（生後11カ月）女児A

ブロック遊びの場面

プラスチック製のブロックを組み合わせてAに渡すと、Aはそれはずして笑い、はずしたブロックを保育者Wに差し出す。保育者Wは再びブロックを組み合わせ、Aに渡し、Aはそれはずす、というやりとりを数回繰り返すと、Aは笑顔で保育者Wを見た後、2メートルほど離れた場所にいた担当保育者Uの方を見る。保育者Uは目を合わせ、「取れたね、ブロック楽しいね」と声をかける。Aは保育者Wの方を向き、遊びを再開する。

## 考察

事例1の女児Aの1か月後の姿である。担当保育者Uから離れても不安がらずに過ごせるようになり、更に簡単なやりもらい遊びを楽しめるようになってきた。Aは保育者Wと楽しさを共有しながらも保育者Uが気になったのだろう。保育者Uの姿を探していたのか、楽しい気持ちであることを知ってもらいたかったのかは特定できないが、いずれにせよ、保育者Uの反応を確認することでAは安心し、遊びを続けることができたのだと思われる。ここで注目したいのが保育者Uのかわりである。Aが保育者Uに視線を向けたとき、もし保育者Uがその視線に気づかなかったとしたら、Aの姿は違ったものになっていたであろう。離れたところにおいても保育者Uは常にAに気持ちを傾け、いつでも要求に応えられるような配慮をしていた。これは「養育者の巧みな配慮」<sup>3,3)</sup>と捉えることができる。

## 事例3

2015年9月中旬

0歳児（生後12カ月）男児B

幅50cm、奥行き50cm、高さ40cmのウレタン製トンネル型遊具で遊んでいる場面

遊具をはさんでBと保育者Wが対面している状態

Bがトンネル部分から顔を出していたので、保育者Wも「ばあ」と言いながら顔を出す。Bが保育者Wに向かって笑顔で右手を差し出したので、保育者Wは「Bくん、おいで」とトンネルをくぐるよう誘う。Bは両手、両足を床につけ、進もうとするがトンネルの直前で止まってしまう。保育者Wは「大丈夫、怖くないよ、来てごらん」と、トンネルの向こう側で両手を出しながら言葉をかける。するとBは一步前へ進む。保育者は「そうそう、おいで」と更に言葉をかける。Bはトンネルの上部に何度か頭をつかえさせ、そのたびに止まって保育者Wの顔を見る。保育者は「もう少しだよ」と言葉をかける。これを何度か繰り返し、Bは保育者Wの所まで行く。

## 考察

Bは好奇心旺盛で、興味をもった事には自分からかわることが多い。しかし、トンネル部分は若干暗くなっていたため少々不安になったのだろう。その気持ちを察した保育者WはBが安心できるような言葉をかけ、新しいことをしてみようという気持ちをもてるようにした。保育者Wの表情や言葉で安心したBはトンネルをくぐって保育者Wの元へ行こうとする姿に変化した。その後、頭をぶつける、止まるを何度か繰り返している。やり方がわからず戸惑っていたということも考えられるので、できるかどうか不安だという思いのみだったとは断定できないが、保育者Wの励ましの言葉が、「進もう」という行動の表れる要因になっていることは考えられる。初めての経験に不安が伴ったとしても、信頼できる保育者（＝大人）

の表情や言葉を頼りに、「やってみよう」という行動が起こり得るといことが考えられる。

#### 事例 4

2015年7月下旬

1歳児（生後17カ月）女児 C

片栗粉遊びの場面

ボウルの中の片栗粉に水を入れ、液体になった状態を触ってみることを保育者が誘う。Cは首を振り、触ろうとしない。そこで担当保育者 X は C を抱き、保育者自身が触って見せながら「ほら、おもしろいよ」と言葉をかけた。Cは保育者 X の顔を見つめた。すかさず保育者 X は C の目の前で「見て見て」と液体をすくい、上から落としてみせた。それを見た C はボウルに手を入れ、人差し指で触る。その姿を見て保育者 X が「そうそう、どう?」と聞く。Cは笑顔になり、右手を入れて液体をつかむ。保育者 X が「ね? おもしろいでしょ?」と言葉をかける。

#### 考察

片栗粉が粉の状態のときは喜んで触り、感触を楽しんでいたが、液体になった途端、Cは抵抗を示した。担当保育者 X は感触の変化を楽しんでほしいという思いと、Cは慣れてしまえば必ずこの遊びを楽しめるはずだという見通しをもっていたので、自身が楽しそうに振るまうことで、Cの抵抗を弱め、興味をもてるような配慮をしたのである。結果、保育者 X の予想通り、感触に慣れると両手でつかんだり、敷いてあったシートの上に垂らしたりと、楽しむ姿が見られた。目の前で粉から液体への変化を見たことが抵抗や不安の要素にはなってしまったが、保育者 X がして見せることが C 自身の行動をおこすことにつながった。楽しいという思いをもったと同時に、「先生の言ったことや、したことは本当に楽しいんだ」という保育者 X の言動への信用にもつながっていると思われる。このような経験を重ねることは保育者への信頼が高まっていく要因となるであろう。

#### 事例 5

2015年6月中旬

2歳児（生後30カ月）男児 D

保育室内で縦16.5cm横21.5cm、12ピースの  
パズルをして遊んでいる場面

Dは一人で黙々とパズルをはめている。最後のピースをはめ終わったとき、パズルを見て笑顔になり、その後首を左右に振って保育者の姿を探す。気づいた担当保育者 Y は「すごい、一人でできたね、やったー」と言葉をかける。Dは「うん」と返事をし、再度パズルを見る。

#### 考察

Dはそれまで、パズルをしても途中で友達に邪魔をされたり、最後まで完成させられず「できない」とあきらめてしまったりする姿が見られていた。それがこの日は一人でじっくりと取り組む環境があり、担当保育者 Y もそれに気づいていた。Dの進行状況を何度か確認していたため、完成した瞬間をとらえることができ、喜びを共有することもできた。日々かかわっている保育者 Y だからこそ、いつもと違う姿に気づき、「もしかしたら」という期待をもつことができるし、Dの世界を邪魔せずに心の中で励ますこともできたのだろう。Dが保育者 Y の姿を探した時、保育者 Y が D と視線を合わせられる場にいたということも D の気持ち安定する要因となっている。このような見えない支えやかかわり、援助の先に子どもと保育者との言葉のやりとりが成り立ったのだと考えられる。

#### 事例 6

2015年7月中旬

2歳児（生後31カ月）男児 D

給食中、苦手な野菜を食べるかどうか迷っている場面

担当以外の保育者 Z と一緒に給食を食べていた D だが、最後まで苦手な野菜が残って

いた。「一口食べて終わりにしよう」と保育者Zが言葉をかけると、うなずいて食べ始めた。食べた姿を見て保育者Zは「食べたね。じゃあ終わりね」と言い、食器の片づけを促した。Dは野菜の残った食器を見た後、担当保育者Yを見た。保育者Yが笑顔でうなずくと、Dは食器を持ち、片づけに行った。

### 考察

Dが野菜を苦手に行っていることは保育者Zも理解していたので、Dが食べられる範囲で言葉をかけていた。しかし、保育者Zとのやりとりだけでは不安に思ったのだろう。Dは担当保育者Yの方を向き、反応を確認した。保育者Yもそれを察したので、「一口食べたね、お片づけしておいで」という気持ちを込めてうなずいた。自分がこれからとる行動が、置かれている状況にふさわしいものなのかどうか、最終的には信頼している担当保育者の反応を確認したと考えられるし、子どもと保育者が互いに信頼関係ができていくという感覚があったからこそ、視線とうなずきという非言語コミュニケーションでのやり取りが成り立ったと考えられる。どのような行動をとったらよいかわからない状況に置かれたときに、他者の情動表出を見て自分の行動を決めるという姿から、信頼できる他者が社会的参照の対象となっている<sup>4)</sup>ことがわかる事例といえる。

### 事例7

2015年9月初旬  
2歳児（生後32カ月）男児E  
午前9時20分 朝の会でクラス全員が集まる場面

椅子に座り、担当保育者Zの話を聞いている。保育者Zが「お歌を歌います。立ちましょう」と全員に呼びかけるとEは立ち上がり、保育者Zを見ながら保育室内を走り回る。保育者Zが「Eくん、今は何をする時間ですか?」と話しかけるが、Eは口元に笑みを浮かべ、保育者Zの顔を見ながら

走り続ける。

### 考察

このようなEの姿は4月から時々見られていて、9月には頻繁に見られるようになった。保育環境に変化があったことも原因のひとつと考えられるのだが、変化があったからこそ担当保育者Zの愛情を確認したかったようである。Eにとって、保育者Zへの社会的参照がその手段だったのではないだろうか。保育者Zの顔(表情)を見て走り回るというのは、自分の行動に対して何か反応してくれると予測していたのだろう。皆で同じことをしている状況で保育者Zが自分のために反応してくれるには、皆と違う行動、すなわち間違った行動をすることである。してはいけない行動と理解しているからこそ保育者Zの顔を見ながら走り回ったのだろうし、予測通り保育者Zに声をかけてもらえたことが自分の存在を認め、大切に思ってもらえているという感覚に変わったからこそ笑みが出たのではないだろうか。この後保育者Zの根気強いかかわりにより、1カ月ほど経つと皆と違う行動をすることはなくなっていった。月齢が上がるにしたがって社会的参照の動機も様々な要因が絡み、より複雑になっていくことがわかる。保育者は目の前の子どもの姿からその背景を多面的に捉え、心情を読み取りながら寄り添っていく必要がある。

### 総合考察

#### (1) 発達という視点から

社会的参照は生後9カ月頃から見られる姿だが、その動作の要因となる、大人に向けられる視線の動機が変化していくことが事例から推測できる。事例1、事例2からは、「社会的参照」の内容が、正否の判断から確認の行為へと変化していることがわかる。これは保育者が子どもの気持ちに寄り添ってかわり続けた結果、子どもと保育者の間に信頼関係が形成されつつあることを示していると考えられる。そして信頼関係が形成されつつあると、事例3のように保育者の励ましによって自己の行動を決定していく姿が見られるようになる。保育者の社会的参照が見られはじめたばかりの頃は新しい事物、

慣れていない事物に対し不安が大きく、その不安も漠然としている。不安を「受容」してもらうことで安心するのである。月齢が上がると今度は受容してくれた保育者(大人)の姿を探し、受容してもらうことを求めるようになる。受容の経験を積むことで安心して事物にかかわれるようになることが信頼関係を築く要因となり、自分でしてみようという意欲につながる。事例4のように本当に楽しい経験となるのか抵抗がある場合でも、保育者がモデルとなって楽しむ様子を見ることで自らかかわろうとする意欲が生まれ、実際に楽しい経験となれば、保育者への信頼が芽生える。信頼関係が築かれはじめると、次はしても良いことなのかどうかの「確認」が伴ってくる。事例6、事例7のように信頼している保育者のうなずきにより、「受容」と「確認」が安心に変わると、自信をもって行動する力になる。「受容」から「確認」へと変化していく様子は、他人とのコミュニケーション能力の発達、育ちと捉えることもできるであろう。

## (2) 自己肯定感を育むという視点から

自己肯定感について、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説<sup>14)</sup>によると、「保育教諭等が園児一人一人を人格を持った主体として尊重し、かけがえのない存在として受け止めることで自己を十分に発揮していくことができ、それが自己を肯定する気持ちにつながる」とされている。子どもが「受け止められている」と感じるには、保育者と目を合わせ、表情や身振り、言葉を理解することで自分の行動を確認し、決定・調整していく社会的参照は絶好のかかわりではないだろうか。そして、これを絶好のかかわりと捉えるならば、子どもの参照視に保育者が気づくということが必要不可欠となる。そのため、保育者は子ども一人一人の性格、行動等を理解し、「いま」の姿がどう変化していくのか、予想しなければならない。気持ちを伝える手段として「言葉」が成り立っていない時期だからこそ、その配慮が大切となる。子どもが保育者の反応を求めて参照視したときに保育者と目が合えば子どもは安心するであろう。それが事例2のように離れた所からであれば、より一層その思いが強くなると考えられる。「いつ

も自分を見てくれている、受け止めてくれている」という感覚はやがて存在を認めてもらえているという感覚に変わっていき、自分を肯定する気持ちへ育っていくと考えることができるし<sup>5)</sup>、事例7のように参照の動機が複雑になったとしても、保育者が気持ちに寄り添ってかかわり続けることで、認められているのだという思いが芽生えてくるであろう。

## (3) 保育者のかかわりという視点から

社会的参照を子どもと保育者に欠かせないやりとりと考えると、保育者に必要となってくるのは保育に関する知識を意識化することではないだろうか。日々、子どもの成長を願いながら共に過ごしている保育者であれば、自然な行為としてうなずいたり、目を合わせて微笑んだり、できるようになったことの喜びを共有したりといったかかわりをしていることが多い。

それが意識化され、理論に基づいたものとなれば、保育の質が向上し、専門性を高めることにもなるであろう。観察のすべてが終了した後にはP認定こども園の0歳児、1歳児、2歳児を担当する保育者全員に「社会的参照」を知っているか質問した。「知っている」と答えたのは10名中2名であり、そのうちの1名が事例に該当する保育者だった。それ以外の保育者は社会的参照を意識化していなくても子どもの視線に気づき、ふさわしいと思われるようなかかわりをしていたということになる。一方、社会的参照を「知らない」と答えた保育者に対し、子どもが未知の事象に遭遇したときや、物事の良し悪しを確認するときに保育者に対して視線が向けられているという意識があるか聞いたところ、全員が子どもの視線に気づいていると答えた。社会的参照が意識化されていなくても参照視には気づいているということは、子どもがその次の行動を決定づけるためにも保育者は何らかの対応をしているということは事例からも明らかである。しかし、参照視を意識化すれば、より一層子どもをかけがえのない存在として受け止め、気持ちに寄り添って心情を理解しようとし、かける言葉の数や種類が増えることが考えられる。例えば子どもの行動のよくないことを改めなくてはならないときであったと

しても、行為そのものを改めるようなかかわりとなり、存在を否定することにはならないであろう。たとえ参照視を見落とすことがあったとしても、日々保育を振り返っていれば、その日のかかわりについて反省し、うまくいかなかったかかわりを改善しようと模索するだろうし、子どもの気持ちに寄り添う気持ちも強くなる。それが視線の気づきや心情の推測へとつながるであろう。園全体で取り組めば、保育者がそれぞれに適切な応答やかかわりをする中で、子どもは安心して自分の気持ちを表しながら保育者と双方向的なやりとりを重ねていくことができるのではないだろうか。それが信頼へと変化し、生涯にわたる人との信頼関係の基盤となって培われていく<sup>1,2)</sup>と考えられる。

### 結語

乳幼児に見られる社会的参照は、自分という存在を認め、受け止めてくれる保育者との間に欠かせないコミュニケーション手段である。子どもが自分の行動を決定・調整するのに保育者を求めたとき、保育者が即座に対応するには、子どもの性格や行動の理解はもちろん、社会的参照が意識化されていなければならない。社会的参照を意識したかかわりを日々実践していくことが、信頼関係を築くうえで必要なかかわりのひとつであること、子どもが保育者に向けた視線を、保育者が参照視と解釈し、適切な応答やかかわりが実践できれば、保育の質の向上も期待できる、ということが明らかになった。

本研究では事例をもとに社会的参照と発達との関係、それに伴う保育者の意識化の必要性を考察・検討したが、事例は限られたものであった。社会的参照を意識化した保育者のかかわりの必要性を普遍化するため、今後は更に多角的な事例の検討が必要である。

### 謝辞

本研究にあたり協力してくださったP認定こども園の先生方、子ども達に深く御礼申し上げます。

### 参考・引用文献

1) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連

携型認定こども園教育・保育要領解説』、フレーベル館、2015、P46,PP87-89

2) 小西行郎・遠藤利彦『赤ちゃん学を学ぶ人のために』、世界思想社、2012、P193

3) 遠藤利彦 小沢哲史「乳幼児期における社会的参照の発達の意味およびその発達プロセスに関する理論的検討」、『心理学研究』（第71巻—第6号）、2001、P500,P510

4) 無藤隆・藤崎真知代『保育の心理学I』、北大路書房、2011、P28

5) 鯨岡峻『保育の場で子どもの心をどのように育むのか—「接面」での心の動きをエピソードに綴る—』、ミネルヴァ書房、2015、PP66-69

## ABSTRACT

A case study on the interaction between childcare workers and young children for establishing their good relationships: From the viewpoint of social referencing

Tomoko Fujita<sup>1\*</sup>, Shinichi Ohmomo<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Sakaiwahigashi Kindergarten(both include accredited nursery centers)

<sup>2</sup> Department of Child Studies, Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture

\* Correspondence, fujita@sakaiwa.ed.jp

For young children, childcare facilities such as certified children centers are the places where they spend most of the daytime with people outside of their families. It is necessary for young children to establish a good relationship with their childcare workers in order to spend their time at the childcare facilities without anxiety.

This study hypothesizes that an accumulation of childcare workers' recognizing children's social referencing and responding appropriately to it could form the basis for building a good relationship between childcare workers and children. The purpose of this study is to examine this hypothesis, by using some case examples as data.

The main findings are as follows. (1) What children seek by using their social referencing changes as they grow up. (2) If childcare workers recognize children's social referencing and appropriately respond to it, they will win children's confidence. This will then help them build a good relationship with children. (3) It is important for childcare workers to get a deep understanding of children's characteristics and behaviors and to be ready for recognizing children's social referencing.

If childcare workers keep in mind that responding children's social referencing is a crucial factor in establishing a good relationship with children, they will pay more attention to the way they care children. This helps childcare workers develop children's self-affirmation.

Key Words: childcare workers, good relationship, social referencing, self-affirmation